



改元騒動について考えたこと

設楽春樹（フォーラム運営委員）

打ち振られる日の丸の旗の波、感涙にむせぶ人々、万歳の声に手を振る天皇・皇后、いつの時代のことか？ 今でしょ。5月4日の皇居、一般参賀の話です。この日6回行われ、計14万人以上の国民が皇居を訪れました。朝日新聞（5月2日）は「新天皇陛下が第126代（神話も含む）天皇として即位」と報道しました。多くのメディアはこの「神話も含む」さえ省略して、相変わらずの片面的な敬語報道に終始。そして男系男子が皇位を世襲するという何とも前近代的な行事を、国を挙げて祝賀するということになりました。



仮に天皇が126代目だとしても、「大化」から始まる元号は「令和」で248個め（北朝の元号も含む）。つまり天皇の在位と元号は一致していなかった。明治になって一世一元の制となり、1979年に元号法で法制化されました。マスコミは「平成最後の〇〇」「令和最初の〇〇」と囃し立て、4月30日～5月1日、テレビ各局は「行く時代くる時代・時代越し」「平成の大晦日、令和につなぐテレビ」などと銘打った特番を放送。そして政府は5月1日を祝日としたため10連休となり、国民のウキウキ感が高揚。官民挙げてうまい演出だったと思います。5月1日がメーデーだなんて意識した人がどれだけいたことか。この改元騒動に付き合った国民の多くは、元号、祝日、天皇制を一つのパッケージにした仕掛けに見事に引っかかってしまったわけです。

少し戻りますが、4月13日（土）の朝日新聞の記事を見ていた妻が「何これ？」と声をあげました。記事は「平成と天皇一両陛下と私」、記者の聞き書きの文章ですが、映画監督の山

田洋次氏の発言です。「寅さんは両陛下のことが好きだと思います。…2012年の文化勲章の親授式で…陛下はじーと僕を見つめられた。…国民と真摯に向き合われる姿勢を感じ…」などという調子の文章が載っています。誠実で庶民目線で映画を作り続けた山田監督ってこんな程度だったのかと驚きました。実は、かなり民主的で誠実な人でも、天皇・皇后についてはこうなってしまう人が意外に多いもの。注意しなくてはならないのは、天皇・皇后個人がいかに誠実でリベラルな人物であっても、そのことと天皇制は区別して考えなければならないということです。

これまで天皇制が果たしてきた役割を学習すること、そして、特定の血統の一族を特別扱いする制度を現在そして未来に存続させることが日本社会と日本人にとって果たして良いことなのか、タブー視することなく活発に議論していくことが必要だと思います。それは、天皇制の問題が、人間や社会の在り方の本質にかかわる重要なテーマだからです。

天皇制を「前時代の遺物」と呼んだ人がいます。確かに、天皇即位時に、天孫降臨の際に天照大神がニギハヤヒに授けたとされる三種の神器を皇位の印として引き継ぐ儀式が行われました。5月13日に皇居・宮中三殿

で行われた「齋田点定の儀」は、11月の大嘗祭で神前に供える米を育てる地域を定める儀式ですが、亀の甲羅をあぶって生じる亀裂で占うというもの。この亀甲占いは、私が高校の社会科教員だった時、確か世界史の教科書に出ていたはずだと思って見直したら、中国の殷王朝（前16世紀～前11世紀）の説明に出ていました。殷王がこうして祭政一致の政治を行っていたという説明でした。殷王朝の時代は日本では縄文時代、「前時代の遺物」なんてもんじゃない。大体、こういう神道形式の儀式は宗教色が極めて強いもので、特に即位の礼の一連の儀式は国事行為であり、憲法違反の可能性があると思います。

天皇・皇族に対する甚だしい人権侵害から、象徴天皇制を「日本に残った最後の奴隷制」と表現した人もいます（法哲学者の井上達夫氏・朝日新聞5月3日・文化文芸欄）。例えば今の雅子皇后、華々しく外交官としてスタートした小和田雅子さんは、憲法で保障された人権の多くが認められない皇室という世界に入り込んでしまいました。彼女が適応障害と診断されたのは2004年、すでに15年が経過しましたが治癒していません。人間らしく生きる権利が侵害され、ストレス因子が除去されれば症状が消失するとされる精神障害の被害者を、多くの国民は、当然のこととして15年間も放置したままです。そして今、祝賀の日の丸と万歳の巨大な渦の真ん中で、その環境のために心を病みながら必死でその役割を演じている皇后の姿を、私たちはどう考えたらよいのでしょうか。

第一次大戦後、当時、世界で最も民主的と言われたワイマール憲法（1919）を成立させたドイツがなぜ、最悪のファシズム国家になったのか。ドイツの心理学者、エーリッヒ・フロム（1900～1980）はその著書『自由からの逃走』（1941）で、ファシズム台頭の原因を分析しました。そのキーワードのひとつが「サ

ド・マゾ的性格」、言い換えると「権威主義的性格」、つまり強いものに従順、弱いものは攻撃するという性格です。フロムはドイツの下層中産階級の大部分にこの性格が典型的にみられると述べています。実際、彼らはヒトラーの権威に絶対的に服従し、ユダヤ人を虐待、虐殺していきました。そこには個人の自由な思考や行動、個性や主体性の尊重のかけらも見られませんでした。

9条の会の呼びかけ人の一人であった加藤周一氏（1919～2008）は、かつて日本が犯した戦争犯罪は「現場で直接に手を下す人間と、彼らの行動を条件づけている日本の文化・社会との共同作業」だったとし、その日本文化の特徴の一つが「大勢順応主義」だと述べています。さらに「これがいまでも存在するかどうかを問い、存在するとすればこれと戦うべきでしょう」としています。（『戦争責任の受けとめかた』1993・編集/国民教育文化総合研究所）

残念ながら、今も日本は権威に極端に弱いし、同調圧力の強い社会です。自分の頭で考えず、権威に従い、社会全体の流れに従っていく人が多い社会です。特に権威の代表である天皇については、祝賀や歓喜の大合唱の中で、それに逆行する言論や行動には勇気が必要です。

この機会に、天皇制を支える日本人一人ひとりの心のあり様についても考えてみたらどうでしょうか。

